



クローバー牧場

クローバー航海記3

近くに見えたとはいずれのその島は進んで進んでもたどりつきません。

大きいのです。とてつもなく大きいものだから、近くに見えたその島にはなかなかたどり着けませんでした。

そうして、ようやくのことたどり着いたその島に皆がおどろきました。

その島の真ん中には大口をあんぐりと開けて海の

水をゴクゴク飲みこむように洞窟がぽつかりと空
いています。

そして、島の奥へ続いているようでした。

中は暗やみです。何も見えません。

その穴を眺めながら、皆は息を飲みました。
船をこぐ手を止めて、嵐の海を漂いながら。

しばらくして、誰かが言いました。

「あの洞窟を進んでいこう」

そうだが、とうなずきながらまた誰かが言いました。

「この島の向こうには青空があつた。でもこの島は

大きすぎる。回って行くことはできないだろう。この洞窟の中を進むのが近道だ」
そうだ。

そうするしかない。

誰かの合図があるわけでもなく、ゆつくりと、おびただしい数の船たちが洞窟に向かって進み始めました。

真つ暗で真つ黒な洞窟はシーンと静まりかえつていて、外で吹き荒れていた嵐はうそのようです。

小さな波の音だけが聞こえてきます。

船たちは進んでいきました。

出口の向こうにある青空を目指して。

その時です。

誰かが大きな声で言いました。

「ダメだ！みんな、もつと静かにこいでくれ！壁が崩れてきているんだ！」

ガラガラ、ビシャン。

ドドド、バシヤーン。

「静かにつて、そんなに強くこいでいないよ！」

「そうだ。これぐらい弱くこいでいけば平気だろう？」

すると、また大きな声がひびきました。

「一人ひとりが小さい力でこいでいても、その小さな波がぶつかり合って、ぶつかり合ってどんどん大きくなってしまふんだ。壁にたどりつく波はかなり大きいんだよ。もつと弱くこごう。この洞窟が崩れないように！」

その声を聞いて、船たちの進みはさらにゆつくりになりました。

まるで止とまっているかのよう。

「クソツ、クソツ！」

若わか者が歯はぎしりをするように言いいました。

洞窟どうくつに入はいってしばらくのこと。

ワーツ！

突然とつぜん、騒さわがしくなる船ふねたちがいました。

「コロナウイルスだ！」

「感染かんせんしたんだ！」

騒さわがしくなる船ふねたちの真まん中なかに小ちいさな家船いえふねがいま

した。3人家族の家船です。

お母さんがグツタリとして立てなくなっています。横たわるお母さんをお父さんが抱えています。

そばには小さな男の子が心配そうにお母さんを見つめながら立ちすくんでいます。

「早く病院船へ連れていけ！」

「おい、やたらと動かすな！他にうつしてしまっぞ！」

「ちよつとみんな、動いて！はなれなきや！」

お父さんはみんなの怒ったような声を聞いてどう

していいか分わからない様子ようすでオロオロしています。
周まわりの船ふねたちが遠とざかつていきます。

必ひつ死しになつて逃にげるように遠とざかつていきます。

いや、逃にがっているのです。

「もつとはなれてくれ！」

その家船いえふねに向むかつてモノを投なげる人ひともいました。

投なげられたモノが水みづに落おち、波なみしぶきが大きおおくた
ちました。

波なみを受うけて家船いえふねは大きおおくゆれ、しぶきは3人にんの顔かお
や体からだにかかりました。

一隻せきだけでポツンと漂ただう家船いえぶねの3人にんはどうしていか分わかりません。

そこへ、いつの間まにか病院船びやういんせんが家船いえぶねにゆつくりと音を立たてずに近ちかづいてきていました。

中なかから、頭あたまから足先あしさきまで白しろい防護服ぼうごふくに身みをつつんだ人ひとが出てきて、そして、家船いえぶねのお父さんとうと何なにかを小聲ここえで話はなしました。

お父さんとうはうなずいて、グツタリとするお母さんかあを支ささえながら歩あるき、そして病院船びやういんせんに乗り込のこませました。

甲板の上を防護服の人に支えられながら力なく歩くお母さん。中に入る前に洞窟の船たちに向かつて小さな声で言いました。

「みなさん、ごめんなさい。ごめいわくをかけてしまつて、ごめんなさい」

ふるえるような声でそう言つて病院船の中に消えていきました。

残されたお父さんと男の子。

「たいへん、もうしわけありませんでした。」
ゆつたりとした、でも大きな声で、周りの家船に向

かつて頭あたまを下げました。

お父とうさんの大おおきな手てで上うから押おされるように、男おとこの子こも頭あたまを下げさせられました。

頭あたまを下さげ終おえたお父とうさんは家船いえぶねを進すすませました。病院船びょういんせんの向むこうに進すすんでいきます。

うわーん。うわーん。

男おとこの子この泣なく声こゑが洞窟どうくつにこだまして、やがて遠とざかり、聞きこえなくなつてしまいました。

「ねえ、お母かあさん、どうして？」

ある家船いえぶねの小さな女おんなの子こです。

3人家族にんかぞくの家船いえぶねの様子ようすを見ていた女おんなの子こは、不思議ふしぎそうです。

「あの人たちひとはどうしてごめなんさいって言ったの」
お母さんかあは、細い目ほそめをして答えこたえました。

「病気びょうきになつたからよ。みんなにうつしてしまふかもしれないから」

「どうして? どうして病気びょうきになつたらあやまるの?」

お母さんかあを見上げみあげて聞ききました。

「うつしてしまふからよ」

「わざとうつすの?」

「わざとじゃないわ、でもうつつてしまふかもしれないからよ」

「病ひやう気きになつたのはあの人ひとたちでしょ? どうしてあの人ひとたちがあやまるの?」

お母かあさんが悲かなしそうにその目めをさらに細ほそくした時ときです。

「クソーツ! あー、もうやめだ! やつてられないよ! どうしてこんなことしてるんだ!? サツサと洞窟どうくつ

の向こうに行つてしまおうぜ！」

若者がついに大声で叫び始めました。

「おい！何を言っている。みんなガマンしてるんだ。みんな同じだぞ！」

「ハッ！バカバカしい。お葬式みたいになつちやつてさ。辛気くさくさくてやつてられないよ！悪いけれど、オレはお先に出口に行かせてもらおうぜ！」

「やめろ、きさま！」

怒鳴り声がひびきます。

ひやはー、と声を裏返らせて若者が船をこぎ始め

ました。

「なんてことしやがる！このやろう！！」

「みんなのめいわくが分らないのか！」

「おい！こんなバカ者、みんなでとつちめてやろう
ぜ！」

その若者の船を取り囲むようにたくさんの船が集
まりました。

「こんなやつ、沈めてやれ！」

一斉に若者船に向かつて船を勢いよく進ませまし
た。

波なみが大きいおおたち、周まわりの船ふねもゆらされます。

「あぶない！やめてくれ！」

そんな声こえが聞きこえてきますが、血ちの気けの多いおお船ふねたちは進すすむのをやめません。

音楽おんがくです。

音楽おんがくが聞きこえてきました。

その音楽おんがくを聞きいて、皆みなの動うごきが小ちひさくなつていきま
し。

そして、ふしぎそうにその音おとのするところを探さがしま

した。

うす暗い洞窟ですが、その音が聞こえてくる先を見つけて、誰かが声をあげました。

「見て！病院船！」

病院船の舳先に赤いドレスの女の人立っていました。あごの下にはバイオリン。

バイオリンを静かに、でも大きくゆれるようにおどるように奏でています。

海を背中にして立ち、奏でています。

音色をまるで病院船の中に向かって聞かせるよう

に、届けるように。

その音色はどこか悲しげで、でもやさしくもあり
ます。

高く、低く、旋律は大きく揺れ動きます。

病院船に向けられたその音色ですが、反射して、
共鳴してすべての家船を包むようです。

時に力強くひびき、洞窟の人々の心に突きささり
ます。

防護服を着た人たちが甲板に出てきました。

時を忘れるかのように聴き入っています。

病院船の窓からベッドが見えました。

感染したお母さんがベッドに寝ています。その耳にもきつと音色が聞こえているでしょう。

女の子のお母さんが言いました。

「そうね。そうよね。謝ることなんてないわね。あなたの言うとおりに、謝るなんておかしいわ。病気になるってかわいそうなのはあの人。大変なのはあの家族。みんなで支えてあげなきゃね。」

病院船を見つめながらそう言って、お母さんは女の子の頭をやさしくゆつくりなでてあげました。

その目は細くなく、やわらかい目でした。

女の子はそんなお母さんの目を見て、うれしくて、
「がんばって！治してね！きつと治るよ！」
ありつたけの声で病院船に叫びました。

バイオリンはひびき続きます。

若者船に集まっていた人たちは、気が抜けたよう
になって元の流れに戻っていきました。

若者はうなだれて、何も言わずにみんなと同じ流
れにゆつくりと戻っていきました。

クローバーキッズのみんなへ

馬を世話すること、調教をすることはかんたんな
仕事ではありません。

大変です。

クローバー牧場を始めてからずっと、シムはそれを
感じていました。

コロナウイルスのせいで、お客さんや皆を誰も呼べ
なくなってしまうてからは、それがさらに大変にな

つています。

でもね、ステイホームで辛抱しんぼうしているみんなにこんなことを言うのはちよつと気が引ひけるのだけれど……、馬たちといつしよにいられるというのは幸しあせです。

馬がかわいらしい仕草しぐさをしているとき。

放牧ほうぼくで寝ねつ転ころがっているとき。

調教ちやうきやうですばらしい運動うんどうができるようになったとき。

元氣げんきいっぱいえさに餌えさを食たべる馬みを見るとき。

大変たいへんさを忘わすれて、幸しあせな気分きぶんになれます。

クローバー牧場を始めて良かったな、と心から思えます。

まだ、もう少しステイホーム。

辛抱しなければいけないようだ。

がんばつていこう。

シムたちは、今、またみんなを迎えられるようにキツズの活動プランを練っています。

近いうちにお知らせするので、待っていてください。馬に会える日はそう、遠くないよ。

